北緯64度でのビックスワンとの出会い

八　木　　博

レナ川の水の色は決して澄んだきれいな水でありませんが、青い空が水辺に映った時には、水平線の彼方まで空の蒼さより美しく、手づかずの大自然を満喫する事ができます。

13日から19日までは、天候に恵まれて鏡のような水辺に自然の風景が映し出されて中州の中にある湖沼をボートで白鳥を探索の毎日でした。福島では考えられないようなすばらしい自然、食餌になるような水草の群落、白鳥が居ないのが不思議でした。しかしカモ達の親子にはよく出会いました。何処でも見られるのがアジサシ、ユリカモメでした。

20日には朝からの南風で、川面は大きな波になって船を叩きつけ、時折大きな波音が船底に大きな音でぶつかり岸から船をつないでいたロープが波のためにぶっち切れて一時は流されることもあって大変でした。昨日までとはまったく違った荒れ狂うレナ川の様子、これが北風だったらもっと波が高く今よりも大変だったとの事でした。岸辺にぶつからぬようにエンジンが一日中かかりっぱなしで、船のゆれとエンジンの音で寝ることもできません。調査が打ち切られ、テントも風の少ない場所に移動して、ただ早く風が止むのを待つ休養の一日でした。

翌日は風も止み東の空が明るくなって青空が見え始め午後一時に「ヤギサン」とニコライフさんに指名されて彼の船に乗り込みました。気が合うのか、だいぶニコライさんとは、白鳥の探索には出掛けました。エンジンは新品ですが、船足は他の二艘の半分くらいのスピードです。今日はベースキャプ地の向かいの大きな中州が目的地です。皆さんと後で合流するために早めの出発です。昨日の荒れ狂ったレナ川とは違って静かな波のなか、目的地に向いました。アジサシ、ヒメユリカモメ等、福島では観察ができなくなったアカモズ等を見ることができました。一回目の中州上陸ではニコライさんが炊き火を始め、生木や草などを燃やして、煙を上げて蚊を追い払い、狼煙を上げ私達の位置を知らせるためです。今回の調査では無線機がないために昔ながらの狼煙を上げているのだと思い、ヤナギの枝を折って燃やしましたが、他の船には気ずかれなかったようでした。その間ニコライさんは１メートル以上の草叢のなかを越えて沼の調査にいきました。しばらくして汗びっしょりになって帰ってきましたが、ニコライさんは白鳥を見付けることはできませんでした。

二回の上陸地点で私の手のひらに教字の１00を書きました。さらに沼の様子をジェスチャーで教えてくれましたので「１00m先に沼があるから」と言葉が通じれば話したのかも知れません。カメラを持って気軽に出掛けました。林中には山道はありません。ニコライさんは眼の高さ木の枝を折りながら進みます。しかしヘラジカの獣道はやはり歩きやすく、手ずかずの自然林の中はヘラジカの休み場所もあり、周囲が２m位が草がなく、ヘラジカの大きさが想像付きます。ヤナギからシラカバ、山中に入るにしたがって針葉樹林帯で多くの野鳥がおります。アカウソ、アオカケス、ケアシノスリまた

〒960-01　福島県　福島市鎌田字赤沼21-3

四十雀の仲間が群れで飛びまわり、ようやく沼に着いたとき思わぬ雨が降り始まり、沼をとりまく神秘的な木々の緑、水草等とても表現ができないほどの美しさで、疲れも飛んでしまいます。ここから引き返すのかと思ってましたら、ニコライさんはさらに林の中へ、ヘラジカの新しい足跡等や休み場所があって今まで居たのか、ヘラジカに出会えるような気もしました。

4個目の沼にはヒドリガモが3羽のヒナを連れておりました。突然大きな樹にニコライさんが登り始めました（図8）、10m位の位置で周りを調べている様子、どうしたのか道に迷ったのか、言葉が通じないので樹に登った訳がわかりません。とにかくニコライさんの後を付いて行くしかありません。雨は降り止まず黙々と林の中を進みました。広い草原に出ました。草丈が1m位あって、根元は野次坊主になっていて歩きにくく前に進むのが大変です。草原の中程に小高くなった場所には無数のヘラジカの足跡。ヤナギの木陰で雨宿り、一息をいれていました。近くからはマキノセンニュウの鳴声が聞こえてきます。時間は六時十分です。

その時ニコライさんが「スワン」手首を折り曲げて白鳥の形をして指を差しました。50m先の草叢から白鳥の頭だけがゆっくりと動いています。探し求めた白鳥との初出会い私も嬉しさのあまり「おーい」、「おーい」と何回か呼びました。すると白鳥は「コーウ、コーウ」と何回か鳴きながら移動を始めました。今度は首だけでなく体全体がよく見えます（図9）。「ビックスワン」・「ビックスワン」とニコライさんは興奮ぎみです。直ぐにカメラで覗くとぼんやりとしか見えません。雨の中持ち歩いてレンズが曇ってしまいましたので、ヒルターを外して妻の肩を三脚代わりでシャッターを押しました。3枚でフィルムが終りましたので、フィルムを入れ替えようとしましたが、雨でカメラが濡れたのかフィルムが巻き上がりません。残念ですが、先程写した5枚にすべてを賭けました。

しばらくオオハクチョウの様子を見てますと、最初の位置に戻ってきました。ニコライさんも私もヘビイスモーカーです。私のたばこがずぶ濡れて吸いません。ニコライさんが持っていた二本のたばこを分け合いましたが、ニコライさんはマッチが濡れて火がつきません。私のライターでどうにか何回かで火をつける事ができました。今までにない一番美味い気がする「たばこ」でした。

三人で握手をしながら雨の中しばらく白鳥を観察しました。一羽なのか、ヒナがいるかは確認できず、明日のヘリコプターの調査に託して草原を後にしました。自生のグミを食べ、ヤナギに滴り落ちる雨水を飲み、汗と雨とで全身ずぶ濡れになっている今の私、いろんな事を想定して持ってきた装備が生かされず、北国の自然の厳しさを全身で感じる、貴重な二度と出来ない体験をしました。

ベースキャンプ地では、予定の時間になっても戻らない。向かいの中州が見えなくなるようなスコールのために、皆さんが心配され、特に自然の厳しさ知っている山内さんは、最悪の事も考えられ、大変に心配をかけました。探索のボートを出して捜索されていました。帰りの船は雨のなか1時間15分の道程、歩いている時と違ってじっとしているので、川風のため、寒くなるは、足はつっぱるは、狭いボートではどうにもなりません。寒さを吹き飛ばすために立ち上がって、腕に力を入れて、何だかわからない歌を唄い続けました。ベースキャンプ地の舟が見えて、雨のなか皆さんが手を振っております。とにかく無事に帰船しました。乗船後、皆さんの温かい心ずかいで、風邪などひくこともなく、深く感謝いたします。

今回の調査で知った事はハクチョウの繁殖地には、人間が足を踏み入れることが出来ない、神秘的

で広大な豊かな手ずかずの自然の中に生活をしている事を調査で知りました。

しかし、冬になればあの大河レナ川も50㌢以上上の氷に覆われる。生きていくためには、長い距離を旅して本能とは言え、何年も飛来してくるハクチョウを温かく迎えてやりたい。

図8．オオハクチョウがいた沼。草原中央に点のように見える木にニコライさんが登った。

図9．沼のオオハクチョウ。首を上げ、警戒している。

図10．沼を泳ぐオオハクチョウ。22日にヘリコプターから撮影。